

聖霊の力による使徒の働きと教会の発展（使徒言行録講解）

第90講5：コリントの信徒への手紙 第一（5）15～16章

〔今週の御言葉 コリントの信徒への手紙 第一（5）15章12～22節〕

コリント教会の中には、キリストの復活、そしてわたしたちの復活を信じない人たちがいたようです。「死者の復活などない」と主張する人たちがいて教会を惑わしていました。パウロは「キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄」だと語り、「キリストが復活しなかったのなら、あなたがたは今もなお罪の中にあることとなります」と明言しました。キリストの復活は、わたしたちの罪の贖いが成就して、罪の償いとしてのキリストの犠牲が神に受け入れられたことを意味します。もしキリストが死んだままであるとしたら、その犠牲は神に受け入れられず、わたしたちは依然として罪の中にあるのです。しかし神はキリストを復活されました。それによってわたしたちの罪に対する贖いが成就し、神に受け入れられたことを保証するものとなりました。このキリストの復活はわたしたちの初穂としての意味を持ちました。わたしたちもやがて復活するということを保証するものとなったのです。キリストの復活の信仰とわたしたち自身の復活の信仰は一体的なものです。キリストが復活されたことによって、わたしたちの上に重くのしかかり、わたしたちをがんじがらめにしている死を打ち破ってくださったのでした。キリストの復活を信じることはわたしたち自身の復活を信じることでもあります。そしてその約束が空しいものではないことを現すためにもキリストは死を打ち破って復活してくださったのでした。

3. 教会からの質問に対する回答（7～15章）

e. 身体の復活について（15章）

15章では「復活」の問題が論じられます。復活の信仰は、古代人だから信じられた事柄で、科学の時代に生きる現代人にはナンセンスだとするなら誤りです。初代教会の世界は、すでに高度な文明社会であり、現代人同様、死者の復活などありえないことを十分わきまえていました。しかしそれ以上にギリシャ思想では、肉体を魂の牢獄とする「霊肉二元論」の立場から、「肉体の復活」は全く無意味なことと見なされました。当時の人々は、肉体という牢獄からの魂の解放こそ「救い」と考えたからです。それに対してキリスト教は、「肉体の復活」を告白します。「永遠の命」とは単なる「靈魂の不滅」のことではなくて「肉体の復活」であると、靈魂だけではなく肉体の永遠性をも主張したわけです。それは靈魂だけではなく肉体も、神が創造された「善いもの」であり、人間の救いとは、靈魂や心といった精神的なものではなく、靈魂と肉体の両方を含めた「全人的」なものだからでした。人間は靈魂ではなく、靈魂と肉体の両方から成立し、その両方で人間なのです。そして人間は、精神的な事柄だけではなく、肉体的な問題でも悩み、苦しむのであって、精神と肉体の両方において病み、萎え、衰えます。キリストの救いは、その両方に対する救いなの

でした。パウロはここでまず、当時の教会が共通にもっていた信仰告白を語ります。それはパウロ一人の勝手な教えではなくて、当時の教会に流布し、伝承されていた「教会の教え」でした。そしてそれをしっかりと信じるならば、救われる「福音」そのものなのでした。それが15章3～8節で語られていくものです。その要点は、キリストが「わたしたちの罪のために死んだ」こと、そして「三日目に復活」され、多くの目撃者の前に現れたこと、つまり十字架と復活でした。使徒たちが繰り返し語ってきたのは、この「十字架と復活」についての証言だったのです。そのことを確信した上で、パウロはギリシャ思想に惑わされがちなコリント教会に、復活の信仰を述べていきます。キリストの復活が事実であることを目撃証人によって確認し、その上でキリストの復活の意味を問います。それはわたしたちのための復活であったということです。そしてキリストが復活されたのは、わたしたちも復活するためであり、キリストの復活が事実ならば、わたしたちの復活も事実であると論証するのです。そして肉体を蔑視するギリシャ思想に対して「復活の肉体」を論じます。そこには二面があります。復活の体は、今の朽ちていく弱い体とは無関係ではなく、その体が変わえられるものであること、しかしまたこの体の延長にあるのではなく、全く新しくされるということです。自分は、全く自分であるわけですが、それが全く新しくされて自分であるということです。アダムの似姿に生まれた人間は（創世記5章3節）、本来は神の似姿に創造されたのであって（同1節、1章27節）、それはキリスト御自身でした（コロサイ1章15節、2コリント4章4節、ヘブライ1章3節）。だからわたしたちは「栄光から栄光へと主と同じ姿に造り変えられて」いきます（2コリント3章18節）。

コリント教会の中には、キリストの復活、そしてわたしたちの復活を信じない人たちがいたようです。「死者の復活などない」と主張する人たちがいて教会を惑わしていました。パウロは「キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄」だと語り、「キリストが復活しなかったのなら、あなたがたは今もなお罪の中にあることとなります」と明言しました。キリストの復活は、わたしたちの罪の贖いが成就して、罪の償いとしてのキリストの犠牲が神に受け入れられたことを意味します。もしキリストが死んだままであるとしたら、その犠牲は神に受け入れられず、わたしたちは依然として罪の中にあるのです。しかし神はキリストを復活されました。それによってわたしたちの罪に対する贖いが成就し、神に受け入れられたことを保証するものとなりました。このキリストの復活はわたしたちの初穂としての意味を持ちました。わたしたちもやがて復活するということを保証するものとなったのです。キリストの復活の信仰とわたしたち自身の復活の信仰は一体的なものです。キリストが復活されたことによって、わたしたちの上に重くのしかかり、わたしたちをがんじがらめにしている死を打ち破ってくださったのでした。キリストの復活を信じることはわたしたち自身の復活を信じることでもあります。そしてその約束が空しいものではないことを現すためにもキリストは死を打ち破って復活してくださったのでした。

この地上にあるかぎり、わたしたちは朽ちていく肉体の弱さを背負いながら呻き、苦しみつつ歩いていきます。しかしそこには希望があります。この朽ちゆく体が全く新しくされて、朽ちることのない栄光の体に変えられていくからです。「わたしたちは皆、今とは異なる状態に変えられます。たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられます」(15章51、52節)。そこでは、わたしたちを絶望と恐怖と悲しみによって支配している死が、主によってのみこまれ、打ち破られていきます。だから「死は勝利にのみ込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか」(15章54、55節)と、わたしたちも高らかに勝利宣言をすることができるのです。それは、この体をもって果たした地上の働き全体、人生の問題でもあります。だからわたしたちは、堅く立って動かされることなく、主の業に常に励んでいくことができます。この地上での肉体によって果たした「自分たちの苦勞が決して無駄にならないこと」を知っているからです(15章58節)。

4. コリント教会への挨拶(16章)

コリント教会は、第二回伝道旅行でパウロがアクラとプリスキラの家に住み込みながら、伝道して生み出した教会でした。その後パウロはエフェソに行き、二人を残してアンティオキアに戻り、再び第三回伝道旅行に出掛けて、エフェソに戻ります(使徒18章18節～20章1節)。この手紙は、そのエフェソでの三年にわたる働きの間に記されたことが分かります(16章8節)。このコリント教会の礎となったアクラとプリスキラは、その後エフェソに行き、そこでも家の教会を建てていたので、彼らもそこからコリント教会に挨拶を送りました(16章19節)。この手紙を書いた時、パウロはエフェソで大きな困難と迫害に直面していました。たしかに伝道の門は大きく開かれていましたが、反対者にも苦しめられ(16章9節)、「野獣と闘った」と語るほどの闘いで(15章32節)「生きる望みさえ失ってしまう」死の危険に見舞われていました(2コリント1章8～10節)。「外には戦い、内には恐れ」(同7章5節)のただ中で、パウロはコリント教会にこの手紙を書き送ったのです。しかしそこでパウロが最後を締めくくる言葉は、「目を覚ましていなさい。信仰に基づいてしっかり立ちなさい。雄々しく強く生きなさい。何事も愛をもって行いなさい」(13、14節)ということでした。そこには、「信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。愛を追い求めなさい」と、この手紙で語ったことが残響しています(13章13節)。

コリント教会は、実に様々な問題に苦しみ、病んでいました。およそキリストの教会と叫べないほどに罪と弱さに腐敗した面もありました。しかしそういった問題の一つ一つを取り上げて論じた後、最後にパウロが見上げたのは「体の復活の希望」(15章)でした。たしかにコリント教会は病んでおり、問題だらけです。それはキリストの「体である教会」

の問題でもあります。しかしキリストの「体」が復活し、わたしたちの「体」も復活し、「新しい体」に変えられていくという希望の中にあります。それは個々人の「体」だけではなく、「キリストの体である教会」の希望でもあります。「体」がどんなに病み、腐敗し、朽ちるものであったとしても、それはキリストの命によって新しくされ、変えられていきます。そこにキリストの命が臨在されるからです。わたしたち自身の体の内にキリストが宿り、わたしたちを新しくしてくださるように、キリストの体である教会の内にもキリストは臨在し、教会を内側から変え、新しくしていきます。「あなたがたはキリストの体であり」とパウロは語りました（12章27節）。その「体」であるコリント教会そのものも、復活と栄光のからだに変えられる希望の中にあります。だからパウロは、もう一つの手紙で、「わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れた偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰らず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない」と語りました（2コリント4章7～9節）。「土の器」とは、朽ちていく「体」のことです。それは単に個々人の肉体だけではなく、キリストの体である教会も然りです。しかしそこでわたしたちには復活の希望があるのです。「だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの『外なる人』は衰えていくとしても、わたしたちの『内なる人』は日々新たにされていきます。わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです」（同16、18節）。こうして体の復活の希望は、わたしたちの地上の働き全体についての希望をもたらしていくのです。そこでこの手紙全体に響くパウロの言葉は、「こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことをあなたがたは知っているはずですよ」ということなのです。